

令和5年度滋賀県立大学・大学院 学位記授与式 学長式辞

皆さん、ご卒業、ご修了、おめでとうございます。

キャンパスの桜も蕾を大きく膨らませています。春の気配が漂うこの良き日に、令和5年度の滋賀県立大学並びに大学院の学位記授与式を執り行い、学士588名、修士122名、博士3名、計713名の学位取得者の栄誉をたたえることは、本学にとって誠に大きな喜びであります。大杉滋賀県副知事をはじめとするご来賓の方々や、列席の理事・学部長をはじめとする本学の全ての教職員とともに、皆さんのご卒業、ご修了を心よりお祝い申し上げます。参列いただいた保護者の方々にもお祝い申し上げます。

振り返ると四年前、学部生の皆さんであれば入学時から、新型コロナの流行に見舞われ、大変な困難を強いられました。夢に描いていた学生生活とはかけ離れたものだったことでしょう。そのような状況下でも皆さんは勉学への熱意を失わず、学業を成就されました。立派に成長され、こうして卒業・修了の日を迎えられたことに心より敬意を表します。

本学は「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」をモットーに、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」人が育つ大学となることを理念としています。そのような本学で学んだことを誇りに思ってください。予測不能なこれからの時代においては、本学での実践的な学びを通じて身につけた「他者への思いやりの心」と、そして「“地”に足のついた専門性」が、これからの人生を切り拓いていく上で皆さんの大きな力となると信じるからです。

ただし、学位記授与式の今日だからこそ皆さんに伝えたいメッセージがあります。それは「専門性は皆さんの武器となります。と同時に、弱みともなり得ます。その弱みを補うためには、知性を磨き続け、自身の中に複数の視点を持つように努めてください」ということです。

本学の初代学長である日高敏隆先生があるエッセイで次のように書かれています。「人間はまともな先生についてはいけないのだという気がしてくる。かえってものの見方が狭くなってしまふ可能性があるからだ」と。これは、大学にとってはとても悩ましい言葉です。つまり、もし皆さんを指導した先生方がまともで優秀であったとすれば、皆さんのものの見方が狭くなってしまっているということになりますし、逆に、皆さんがものごとを広い視野で見ることができているとすれば、それは先生方がまともではなかったということになってしまふからです。

学位を授与されるとは、特定の分野の専門性を獲得したということです。それはとりもなおさず、その分野ならではのものの見方を獲得したということの意味します。専門的な見方は、ものごとを安定した視座から見るための大きな武器となります。しかし、その見方に囚われすぎてしまうと、ときとして視野が狭くなり、大切なものを見失ってしまう危険性もは

らんでいるのです。

たとえば、世界に目を向けると、各地で武力衝突や紛争が絶えません。もちろん、戦争は許されるものではありません。しかし、各地で起きている戦争のニュースを見ていると、当事者・当事国のいずれかを悪、いずれかを正義と決めつけて、片方の言い分のみを取り上げているのではないかと疑われるような報道も見受けられます。この世の中に絶対の正義など存在しないのではないのでしょうか。私が専門とする環境の分野ですら、ひとつの環境問題への対応が別の環境問題を引き起こしているような事例がでてきています。環境を守ることが絶対の正義だと単純には言い切れない時代になってきているのです。

要は、物事を狭い視野で絶対化して見るのではなく、より広い視野で常に相対化して見るのが大切だということです。ひとつの専門性を獲得した、いまだからこそ必要なのは、専門性の強みと落とし穴をよく理解した上で、社会に出てからも自身の中に複数の視点を持つように知性を磨き続けていただきたいということになります。皆さんが平和で内的に豊かな、持続可能な社会の実現に向けて活躍されることを楽しみにしております。

最後に、この滋賀県立大学は皆さんの母校です。私たち教職員は、いつでも、いかなるときでも、皆さんが本学を訪れることを歓迎します。母校である本学は皆さんの人生の一部であり、これからも皆さんの成長と活躍を見守り続けていく故郷のような存在であることを忘れないでください。

ご卒業、ご修了を改めてお祝いするとともに、これからの皆さんの前途に幸多きことを祈念して、式辞といたします。

令和6年3月20日

滋賀県立大学 学長 井手 慎司